

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は全校生徒 557 名の総合学科高校であり、北は洋野町、南は岩泉町まで、管内広域から生徒が通学している。久慈は東日本大震災はもとより、台風 10 号でも大規模に被災し、常に災害時を想定して学校生活を送ることを意識しなければならない地域である。今年度は防災・復興について学びを深めるとともに、交流を通して地域の良さに気づかせ、岩手県の復興の現状を理解し、復興の担い手としての自身の在り方について考えを深めることを目的とし、交流学習スクールに臨んだ。交流対象校である県立一戸高等学校は内陸部で復興教育スクールの指定を受け、長年先進的取り組みを続けている学校である。また、同じ総合学科高校であり、互いに学んでいる内容に共通点も多くあることから、自分たちの学びを岩手の復興に還元していくための手立てを探るため、1年間を通して様々な交流活動を共に行っていくこととした。

行った。久慈東の各系列の特色や、これまで取り組んできた復興支援等を紹介することで、今後の活動についての意識付けを行った。グループワークを通し、同じ分野を学ぶ高校生同士での共通点の発見や、自分たちの地域についての情報交換につながったようである。会の中では久慈東で長年取り組んできた「防災キット」を紹介し、一緒に作成する取り組みも行った。「防災キット」とは、牛乳パックの中に 1 日生き延びるために必要な糖分やたんぱく質等の栄養分を備えるというものである。共に作成することで防災に対する意識の共有を図り、本校の防災活動を広めることにもつながる会となった。

II 取組の概要

(1) 実践校

○岩手県立久慈東高等学校

介護福祉系列	2 年次	18 名
環境緑化系列	生物生産科目群	2 年次 7 名
情報ビジネス系列	簿記会計科目群	2 年次 14 名

○岩手県立一戸高等学校

介護・福祉系列	2 年次	8 名
生活・文化系列	2 年次	8 名
情報ビジネス系列	2 年次	22 名

(2) 実践日時・場所

○平成 30 年 8 月 28 日(火)

第 1 回交流会 於：久慈東高校 視聴覚室

○平成 30 年 10 月 2 日(火)

第 2 回交流会 於：一戸高校 奥中山農場

○平成 30 年 11 月 3 日(土) 野田村総合文化祭参加

第 3 回交流会 於：野田村体育館

○平成 31 年 1 月 29 日(火) 第 2 回田老交流会実施

第 4 回交流会 於：田老公民館

(3) 取組の概要

①第 1 回交流会

一戸高校を久慈東高校に招き、3 系列合同でアイスブレイクやグループワークを行い、互いを知り合う活動を



(グループワークの様子)



(防災キット作成の様子)

②第 2 回交流会

一戸高校奥中山農場に久慈東が招かれ、一戸高校がこれまで長年野田村で行ってきた復興支援や各年次で行っている復興教育について理解を深めた。野田村総合文化祭では一戸高校の系列の特性を生かした復興支援を行っているとのことであり、介護・福祉系列の足浴やマッサージ、生活・文化系列のピザづくり等を通じた支援方法を体験的に学ばせていただき、自分たちの学びが復

興支援につながっていることや、今後の復興支援の方法について考えを深めた。



(足浴・マッサージ体験)



(ピザづくり体験)

③第3回交流会

一戸高校が毎年参加している野田村総合文化祭に本校も参加させていただいた。第2回の交流会で学んだピザづくりや足浴・マッサージを共に行い、自分たちができる復興支援を行った。特に久慈市と隣接する野田村から通学する生徒も本校には多くおり、自分たちの地域でも復興が目に見えて進んでいる反面、様々な形で復興支援が必要であることを学んだようである。共に野田村総合文化祭に参加することで、自分たちにしかできない支援方法があること、協働することで可能性を広げられることを理解した。



(移動式石窯で地元の子供とピザを焼く様子)



(久慈東・一戸介護福祉系列による共同企画開催の様子)

④第4回交流会

久慈東が4年間取り組んできた田老交流会を、一戸高校と共同開催した。各校の得意なことを生かした交流となり、マッサージを行ったり、恵方巻やコースターを地域の方々と共に作成するなど、終始和やかな雰囲気での交流会となった。互いに刺激を受けながら、今後の復興支援のあり方について意見を交わすきっかけにもなり、次年度に向けて各々が課題と目標を持つことができた。



Ⅲ 取組の成果と課題

1年間の交流を通し、生徒の感想には「協力すれば新しいアイデアが生まれたり、可能性を広げられると思う」「自分たちの交流は小さなことかもしれないが、続けていくことに意味があるのではないか」「一緒に復興を支えていきたい」といった前向きなものが多く見られた。岩手の復興の担い手として、多面的に物事を捉え、協働していくことができる能力と資質を養うことが必要と考える。本事業がその足掛かりになると思われることから、継続して取り組みを続けていきたい。

課題として、継続して事業を続けるためには綿密な計画を行うこと、また各地域の実情を理解するための取り組みを計画していくことが不可欠であると考えている。形骸的な交流ではなく、今後の岩手の復興を担う人材としての育成を図れる交流事業を目指していきたい。